

生徒の主体性と表現力の育成をめざした 教師のOJTの推進

～ICTを効果的に活用する生徒会活動の実現に向けて～

OJT・生徒会活動

美祢市立大嶺中学校

〒759-2212
山口県美祢市大嶺町東分3020

<http://www.c-able.ne.jp/~oomine-j/>

1. 研究の背景

本校では、「自ら考え、表現し、学びを楽しむ生徒を育成する授業づくりのあり方～思いを伝え合い、よさを認め合う関係づくりを通して～」を昨年度の研究主題として設定し、実践研究してきた。その中で、2つの課題があることを把握することができた。

1つ目は、若手教師が多く中堅教師が少ない状態にあるため、校務分掌においては、前年度を引き継ぐのが精一杯で、その場しのぎのルーチンな運営となり、深まりが足りない点である。また、学校の多忙化により、時間的な自由度がなくなり、時間をかけ、試行錯誤しながら経験を積む余裕もなくなっている。2つ目は、よりよい人間関係をつくるのが苦手な生徒が多い点である。教師がリーダー性を感じる生徒の中には、人間関係のトラブルを嫌い、あえて人前に立つことを避ける傾向もみられる。その背景には、相手の気持ちを察したり、自分の思いを伝えたりすることが苦手であることと真の成功体験、感動体験が少なく、自己効力感が不足するとともに、生徒が真面目を否定的に捉える風潮があるためだと推測している。

2. 研究の目的

そこで、若手教師が、学校全体の教育活動を見通して取り組むことができる数少ない校務分掌であり、生徒の主体性を育む教育活動である生徒会活動に研究の焦点を当て、これらの課題を解決していきたいと考え、研究主題を設定した。若手教師は、生徒との年齢も近く、生徒の思いをくみやすい。そこに中堅・ベテラン教師が、これまでの経験や実践を振り返って整理し、若手に対話しながら伝えていく。そうすることで、相互作用が働き、若手教師の実践的指導力向上と自己の実践の振り返り活動による中堅・ベテラン教師の指導力の向上を同時に実現していきたいと考えている。その中で、生徒がICTを使って発表する活動を通して表現力をつけたり、若手教師がICTを使って企画・提案したりする取組を積み重ねていく。このように教師のOJTを推進しながら、生徒がICTを活用する場面を設定することで、生徒の主体性と表現力の育成をめざしたい。

3. 研究の方法

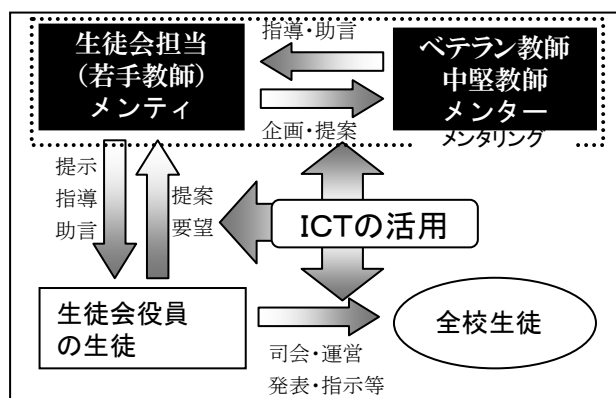
本研究では、ICTの中心機材として、タブレット端末を使用する。タブレット端末は、いつでも、どこでも撮影したり、編集したり、投影したりすることができる強みがあるからである。タブレット端末を用い

て、ICTの3つの特性（即時性、共有性、保存性）を確認しながらOJTを推進することで、生徒の主体性と表現力の育成をめざした取組を展開していきたい。

まず、経験豊かな年長者が、組織内の若年者と定期的・継続的に交流し、対話や助言によって本人の自発的な成長を支援する、メンタリングの手法を用いてOJTを推進する（資料1）。

具体的には、中堅教師とベテラン教師がメンターとなり、生徒会活動を担当する若手教師（メンティ）を支援する体制をつくる（資料2）。その際、委員会活動や行事ごとに若手教師が、担当の中堅・ベテラン教師にタブレット端末を使ってプレゼンテーションをしながら、企画を提案する。それを受けて中堅・ベテラン教師が指導・助言し、両者が対話をするを通して、生徒会活動の取組を深めていく。さらに、若手教師が生徒会役員の生徒にこれからの活動の意図や内容を提示する際にも、プレゼンテーションすることで、具体的なイメージをもたせながら理解させる。

また、生徒会役員の生徒を中心に生徒会活動の中でICTを活用させることで、生徒の手で作り上げるように仕向けるとともに、写真や動画などICTの強みを使って説明させたり、振り返らせたりするを通して、主体性と表現力を育成する。



資料1：メンタリングの手法とICTを活用した生徒会活動

生徒会行事	メンター	メンティ	おもな内容
生徒総会にむけて	堀田・丸谷	日高	生徒総会の進め方について
運動会にむけて	徳光・重岡	福留	ダンス・組体操・応援合戦の実施について
校内文化祭にむけて	堀田・西村	日高・田原	校内文化祭の企画について
リーダー研修会にむけて	西村・堀田	田原	生徒会役員選挙とリーダー研修会の実施について
来年度に向けて	内山・堀田	田原・日高	新生徒会役員の活動について

資料2：生徒会行事におけるメンタリングの実施者とそのおもな内容

4. 研究の内容・経過

(1) タブレット端末（iPad）を活用するための体験研修会

ICTを活用した生徒会行事とOJTを推進するために、まず実際に触って使ってみる経験を積むことが必要と考え、4月22日（水）と7月23日（木）にやまぐち総合教育支援センター教育支援部情報教育班の研究指導主事、西村康成先生と森脇敏雄先生を講師として招き、第1回目はタブレット端末の基本的な使い方や設定の仕方について、第2回目はタブレット端末を使った動画編集の仕方について研修した。

(2) 生徒会行事における実践例1～生徒総会にむけての取組～

① メンタリングの実施

生徒会担当の若手教師が、生徒総会の進め方について、中堅教師にパワーポイントで作成した資料を活用しながら、プレゼンテーションした（資料3）。それを受けた中堅教師は、生徒総会を通して生徒に身に付けさせたい力が明確となった提案ではなかったため、どのような力を付けさせたいのかを話し

合うことで「生徒の話合い活動を充実させる」ことがねらいであることが明確となった。そこで、中堅教師は自身の経験をもとに小集団活動による話し合いの進め方を司会者に理解させることと、話し合いやすい議題にすること、話し合い活動をイメージさせることの3点をアドバイスした。若手教師は、この話し合いを振り返りながら、企画委員会への提案資料を作成した。

② 生徒への提案

若手教師は、①で使用したパワーポイントを改編し、生徒会役員に生徒総会についてプレゼンテーションした。それを受けて、生徒会役員は生徒総会で話し合いたい内容（議事等の内容）について生徒会担当教師と共に話し合い、「誇りをもって校歌が歌える学校にしていきたいためには」が議題として決定した。

③ 話し合いをスムーズにするために

若手教師は、話し合い活動をスムーズに行うために、ICTの強みである保存性と共有性をいかして生徒総会について話し合い方を伝える「話し合いモデル動画」を作ることを提案した。この提案に生徒会役員は賛成し、自分たちでシナリオを書き、実際に撮影をした。この時点では生徒に動画編集の仕方を指導することができていなかったため、教師が編集に携わった。全校集会で完成した映像を披露し、全校生徒に生徒総会の目的や進め方等について説明した（資料4）。



資料3：メンタリングの実際



資料4：「話し合いモデル動画」



資料5：生徒総会におけるICTの活用

④ 縦割り小集団での話し合い活動と生徒総会

全校集会后、縦割り班の班長を集めて、もう一度話し合い活動の進め方について生徒会役員が「話し合いモデル動画」を使いながら話し合いの進め方について詳しく説明をした。それを受けて、縦割り班の班長は話し合いを進め、話し合った結果を生徒会役員に報告した。生徒会役員は各班の話し合った内容を整理し、パワーポイントにまとめて生徒総会当日の話し合い活動で活用した。なお、議事録の作成も、書記を担当した生徒がPCでパワーポイントに打ち込みながら行った（資料5）。

(3) 生徒会行事における実践例2～運動会にむけての取組～

① 企画委員会での提案

今年度の運動会の全体計画を検討する場である企画委員会で、運動会担当の若手教師は、メンタリングで受けたアドバイスをもとに再構成した資料をもとにプレゼンテーションを行った

（資料6）。この若手教師の取組は、他の教師にも刺激を与え、職員会議や研修職員会議でICTを活用してプレゼンテーションをしたり、校外の研修会で学んだことを復伝したりすることの状態化につながった。



資料6：若手教師の提案

② 応援合戦

応援合戦は、本校の運動会で生徒が主体的に取り組む2学期の重要な行事である。その中で、応援団員が夏休み中に応援の内容を事前に撮影・編集し、2学期の初めての練習で他の生徒に視聴させることで、応援合戦の完成像を提示した。そうすることで、練習の見通しが立ち、限られた練習時間を有効に活用することができた。また、何をするのか明確になったため、リーダーの生徒の指示が他の生徒に的確に伝わり、生徒同士がコミュニケーションを取り合いながら教え合う姿が見られた。またICTの「即時性」をいかして練習の様子をタブレット端末で撮影し、「共有性」をいかして実際に全体に上映しながら改善点を指摘し合うことで、完成度を高めた(資料7と8)。運動会終了後の学校評価を読むと、生徒の満足度の高さと伝える力が身に付き、自信をもった姿を垣間見ることができる(資料9)。



資料7：練習を撮影する様子



資料8：撮影した映像をみて改善点を話し合う様子

応援合戦の演舞は今までやったことのない形だったけれど、1年から3年まで朝早く登校して練習したり、放課後にテント応援をしたりと、本番が近づくにつれて1、2年の気持ちも高まって、縦のつながりが強まったと思う。

練習期間が少なくとても大変だったが、充実した1週間だった。特に応援は夏休みから練習をしてきてとても楽しかった。人の前で話したり、教えたりするのはあまり得意ではないが、今回の運動会では少し成長できたと思う。

資料9：学校評価における生徒の感想

(4) ICTならではの特性を生かした実践の蓄積と次年度にむけての取組

① 生徒のICT活用能力の向上を生かす取組

研究の後半となる校内文化祭以降、生徒自身がタブレット端末を使って写真や動画を撮影したものを生徒自身の手でタブレット端末やPCを使って編集をすることができるようになった。そうすることでこれまで担当教師が行っていた、校内文化祭のオープニングやクロージングで上映する動画や3年生を送る会で上映する動画を生徒がシナリオを考え、撮影・編集し、上映することができるようになった(資料10)。また、全校集会でICTを活用した委員会活動のプレゼンテーションも行われるようになった。このようにICTを導入後、リーダーの生徒たちはどのように表現すれば全校生徒が楽



資料10：3年生を送る会で上映した動画

しめるような企画になるのか、どのように話せば全校生徒に伝わるのかを考え、工夫して実際に伝える活動を通して、主体的に生徒会活動に取り組み、伝える力も身に付けてきている。

② ICTを使った実践の蓄積

ICTの保存性をいかして、今年度取り組んだ実践を校内の情報共有するために電子媒体で共有ファイルに保存した。これにより、次年度の生徒会担当者はすぐに参考にできるようになった。

5. 研究の成果

成果は大きく3つある。まず、リーダーとなる生徒は自分たちの伝えたいことを写真や動画を使って編集し、発表の場で活用しながら発表したり、撮影した動画を見ながら話し合い、よりよい演技や演奏になるように改善したりすることを通して、行事を成功させることができたことである。そのリーダーたちのもとでフォロワーとなった生徒も真の成功体験、感動体験を味わい、行事ごとに行うアンケートには、生徒の熱い思いが多数綴られ、よりよい方向に成長しようとする生徒集団へと変容した。その波及効果として、リーダーとなる3年生は、学年全体が日々の授業にもこれまで以上に前向きに取り組むようになった。

次に、生徒会活動の充実が見られるようになったことである。若手教師と中堅・ベテラン教師が対話をする中で、若手教師は生徒との近い距離感を生かしながら、具体的なイメージをもって生徒会行事を企画・運営できるようになってきた。その中で、ICTも効果的に活用させる方法を考え、実践することもできた。

最後に、本研究は生徒会活動を中心とした実践研究であるが、生徒会活動だけでなく、授業や校務処理におけるICTの活用が教師同士の対話と関わり合いが増えることで、授業改善や生徒指導力、ICT活用能力の向上など、あらゆる教育活動に効果が波及したことである。ICTを積極的に教科や道徳の授業で使う教師が大幅に増え、プロジェクタやモニタが足りなくなり、急遽日課変更を行った日がでてくるまでに至った。この流れを継続していきたい。

6. 今後の課題・展望

課題は大きく3つある。まず、生徒の表現力に関する課題である。リーダーの生徒を中心に表現力が高まったという手ごたえはあるが、学校教育活動全てにおいて高まったと言い切れるまでには至っていない。今後は、教科や道徳の授業内でもICT（特にタブレット端末）を生徒が活用する授業づくりに取り組んでいきたい。

次にOJTをより効果的に行うことである。OJTが本校の研修において効果的であるという声は、校内研修の反省の中で多くの教師が認識している。しかし、生徒会活動以外の教育活動においても若手（メンティ）の意欲をより一層引き出す必要がある。来年度は、授業づくりや他の校務分掌においてもOJTを意図的に組み込む研修組織をつくりたい。

最後に、さらなるICT環境の整備である。本校はすべての教室が黒板ではなくホワイトボードであるためICTを活用しやすい環境にある。そこで、プロジェクタをより使いやすい環境整備を進めていく必要がある。タブレット端末については、来年度も予算を確保し購入する予定である。小集団によるタブレット端末を使った授業づくりに挑戦していきたい。

7. おわりに

本校は、校内研修体制の充実を図るために、改革をしている最中である。今回の助成は研究推進の大きな呼び水となった。また、教師や生徒が効果的にICTを活用すれば生徒の主体性と表現力を高めることができることが明らかとなった。今後は、生徒会活動だけでなく授業づくりにも取り入れていきたい。さらに、OJTについても効果があることが明らかとなった。実態に合った組織改編を行い、より一層校内研修が深まり、育てたい生徒像に導くことができる教師力の向上に努めていきたい。

< 参考文献 >

・山口県教育委員会「校内研修【レシピ】～よりよい授業づくりをめざして～」